

大阪大学

I. 実施報告

(1) 実施責任者報告

大阪大学医学部教授 寺本 明夫

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

大阪大学では、一般社会向けの公開講座の一つとして昭和55年度から放送利用の大学公開講座（ラジオ講座及びテレビ講座）を実施している。これは、本学における研究の成果を各テーマ毎になるべく解り易い形で一般市民に公開し伝達しようとするものである。また地域社会への貢献と大学と地域社会との密接な関係を成立させようとするものである。高度情報社会あるいは「豊かな」成熟社会といわれる今日、大学の高度な専門研究の知識を地域社会の発展と向上に役立てる必要性を認識し、放送講座を通して、その実現を試みようとしている。

本学では、この放送講座の他に開放講座（定員 1,500名、講義回数14回、大阪市中央公会堂使用、大阪市教育委員会共催）も実施しているが、両講座とも全学が取り組む課題と考えており、全学的な開放講座運営委員会を設置し、両講座の円滑な実施を図っている。このことは、本学が大学教育の開放という課題に重大な関心を示すものであり、本学における両講座の重要な位置づけを示すものといえてよい。

本学は、今年で放送講座は13回を数え、更に新年度の講座の開講が決して、いま準備に入っている。

放送講座の実施に当たっては、本学の開放講座運営委員会及び講座の実施を行う部局（主管部局）とラジオ・テレビ各放送局とが互いに連絡協議をしながら番組制作を行っており、両者の間の行きちがいその他のマイナス面を極力ふせぐ努力をしている。両者の協調関係は、より一層の放送教育の発展を目指して、細部的な打合わせから目的の実現へ向けて注意深く行われる必要があり、その点大学側も放送局側も互いの立場をよく理解しつつ可能なかぎり円滑に行われてきている。

また、本講座では受講生を大学に集めてスクーリングを行っており、大学側と地域社会の住民とが直接交流する場も設けている。いまの大学及び放送メディアの提供可能な枠組の中で、今後さらなる発展のための検討が加えられるはずである。

2. テーマの選定とそのねらいについて

(1) ラジオ講座（現代社会を考える）

「不透明」だと言われている現代社会。確かに、メガネもなしに漫然とながめていると、それこそ目移りして何も見えてこないという仕儀になりかねない。そこで、経済学とか政治学とか、それぞれ違った屈折率のメガネを用意して、とりわけ今の世の仕組みについて、

それなりの見通しをつけてみようというのが、この講座のねらいである。

(2) テレビ講座（くらしの中の看護と医療技術）

人間は、受精後胎児期を経て出生し、小児期、思春期、成人期、老年期を経過して生涯を終える。我々にとって、この過程を通じ、健康を保つことや病気にかからないよう注意することは、最大の感心事である。たとえ、病気になったとしても、早く回復してもとの健康な状態にもどれるようにと望み、また回復が不可能だと思われる場合でも、苦痛や苦悩のない状態で天寿を全うできるようにと願う。このような要望に応えるため、どのような方法で対処し、実践すればよいかは、保健医療活動の主要な課題で、医師以外に看護婦や様々な職種の医療技術者がこれらの課題に取り組んでいる。その実践がどのような科学的根拠に基づいて行われているかを解説するのが、この講座のねらいである。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

本学の放送講座は、放送番組、印刷教材及び学習指導（スクーリング）の3本柱により構成されている。

番組については、全体の構想をたてるために、まず、全体テーマと各回の内容との関連性、講座全体の統一性を考慮したテキスト原稿の作成を各講師に依頼し、各講師の作成したテキスト原稿を主任・副主任講師が前述した事項について検討・調整し、それを番組のシナリオ作成の原案とした。この原案にもとづきシナリオを作成のうえ、シナリオライターと各講師が打合せをし番組内容を決定した。このように、テキスト原稿→シナリオ→番組という形になったが、番組だけでも講義内容が理解できるようにし、テキストについても、講義を補完するものではあるが、必ずしも放送内容に合致しているとは限らず、ラジオ・テレビ両講座とも独立した著作物としてテキストのみでも講義の全貌が把握、理解できるように編集した。

また、学習指導（スクーリング）については、予め受講生から寄せられた質問カードによる質疑応答を中心として番組、テキストだけでは説明し得なかった部分の解説の他、講義の補足説明を行うことで、より深い理解と、これからの学習意欲を高めるための契機となるものをめざした。

上述の関連づけをもとに、ラジオ・テレビ各講座それぞれ以下の点に工夫をこらし実施した。

（ラジオ講座）

- ① テーマの広がり、多様なアプローチの仕方を示すために、放送番組では、各出演講師の個性が現れるよう、放送台本の作成・番組構成の打合わせの段階で工夫するとともに、いわば素人の聴取者代表ともいえるアナウンサーの役割についても重視した。
- ② テキストについては、専門的なレベルを落とさないようにしながら、しかも、読み易くするように、どのような工夫をすべきかを、学内専門家の指導を請い、出来るかぎりの試みをした。
- ③ スクーリングについては、2回実施することとし、いずれも学内の教室で行い、それぞれ予想外の盛況で質問が多く大幅に時間をオーバーするほどであった。

（テレビ講座）

- ① 講座のレベルは大学教養課程を想定した。

- ② テキストは、わかりやすい形で表現するが、レベルは落とさないよう留意した。
- ③ 番組制作に当たってはテキストを引用することなく、それ自身で完結、理解できるよう工夫した。
- ④ 映像+音声というメディアを活用するため、出来得る限りフィールドに出て撮影するように務めた。
- ⑤ 学習指導に関しては、2回スクーリングを行い、受講生からの質問に解答する形で講義の内容を補完した。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

（ラジオ講座）

「現在社会を考える」といっても、現在の日本のことが念頭にある為、いきおい我が国の品質管理や経営組織のあり方から、もっと広く、日本人論とか日本文化論とか呼ばれる内容まで盛り込まれる結果となった。しかし、「現在社会を考える」ことが、そのまま国際社会の中の日本を考えることになるという、その辺の事情を講師・受講生双方の熱意により理解を得て頂いたと思う。スクーリングにおいては、受講生から熱心に質問がなされ、特に更に突っ込んだ勉強がしたいと発言している者が少なくなかったのが印象に残っている。

（テレビ講座）

日頃行っている看護・医療技術に関する教育研究の中から、日常生活に身近なテーマを取り上げ、その実践がどのような科学的根拠に基づいて行われているかを講義した。受講生からの質問カードやスクーリングにおけるフロアからの質問は、ポイントを突いたものばかりであり、一般市民の冷静な勉学意欲とその熱心さを知り、担当講師全員が感嘆の念を持った。

5. 印刷教材の作成過程について

（ラジオ講座）（テレビ講座）

テキストは講義を補完するもので、必ずしも放送内容に合致しなくともよいが、独立した著作物としてテキストのみで講義の全貌が把握できるよう以下の点に注意しながら編集した。

- ① 講義内容のレベルは大学教養課程程度とし、できるだけわかりやすく、平易に記述する。
- ② 文体はすべて敬体（ですます調）とした。
- ③ 読者の興味を引き出すため、エピソードやコラムなどの囲み「休憩室」を随所に挿入した。
- ④ 図、表、写真などを多くするように努力した。
- ⑤ スペースの許すかぎり参考文献もつけ、読者が更に学習するための一助とした。

原稿は各章を400字詰め原稿用紙20～30枚（図表別）とし、平成4年3月末日締切で依頼した。受理した原稿は主任、副主任講師が通読し、用語、文体、図表の形式、送りがな、仮名遣い等について考慮しながら完成した。

6. 学習指導の実施状況について

(ラジオ講座)

	日 時	場 所	出 席 者			受 講 登 録 者		
			男 性	女 性	計	男性	女性	計
1 回	平成4年11月28日 午後2時～4時	大阪大学 教養部イ号館講堂	52名 (77.6%)	15名 (22.4%)	67名 (100%)	名 266	名 86	名 352
2 回	平成5年1月9日 午後2時～4時		49名 (83.1%)	10名 (16.9%)	59名 (100%)			

(テレビ講座)

	日 時	場 所	出 席 者			受 講 登 録 者		
			男 性	女 性	計	男性	女性	計
1 回	平成4年11月21日 午後2時～4時	大阪大学 医療技術短期大学部 大 講 義 室	57名 (53.8%)	49名 (46.7%)	106名 (100%)	名 237	名 210	名 447
2 回	平成5年1月23日 午後2時～4時		53名 (59.6%)	36名 (40.4%)	89名 (100%)			

両講座とも第1回スクーリングでは、第1回から第7回放送分について対象とし、第2回スクーリングでは、第8回から第13回放送分について対象とした。いずれも、各回担当講師による補講、学習指導、質問状への回答などを行った後、時間の許すかぎり参加者からの質問を受け付け活発な質疑応答を行った。予定時間を大幅にオーバーするほど熱心な質問がつづき、その内容も会社経営者から主婦・学生に及ぶ各層からのバラエティに富んだものであり、出演講師にとっても有益なものが多かった。

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

高度情報社会の到来、「豊かな」知的成熟社会の実現がいわれているが、こうした社会状況において大学のもつ高度な専門知識をどのように地域社会に伝達し、地域社会の発展に役立てるかは現代の高等教育研究機関に課せられた大きな課題である。この課題に応ずるためにはさまざまな方法が考えられるが、高度情報社会においてとくに重視すべき点が、放送メディア（ラジオ、テレビ）の役割であり、その有効な利用である。放送講座は広く一般に普及した放送メディアの手段を使って、大学のもつ多様で高等な専門知識を地域社会の知識と文化の向上のために役立て、成人教育また生涯学習の要求にこたえようとするものである。マス・メディア利用という点で、技術的には困難な点（学問研究をどう映像化するか、また音声放送でどう表現するかなど）もあるが、広範囲の地域住民の要望に応ずることはできる。本学ではこの他、開放講座として全学参加の形で公開講義による地域教育を行っており、かなりの数の一般市民の参加をみている。こうした方法を通して、大学における教育と研究の成果を地域社会に生かそうと試みてきており、今日の社会変化に対応し、かつ地域社会からの反応にもこたえらるとともに、両者の密接な協力関係の確立をはかるものである。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

本学においては、昭和55年度に放送講座を開設して以来終始一貫して研究成果の地域社会への開放を目的としており、現在授業への活用については、具体的な検討はなされていないが、来年度の調査研究項目の一つとして取上げ、研究してゆく考えである。

なお、人間科学部教育技術学講座では、毎年度の「放送講座」そのものの研究を行っている。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

- (1) 本学の実施体制は、開放講座運営委員会が放送講座担当部局を決定し、当該部局が独自で放送内容を企画、立案する主管部局制をとっているが、毎年主管部局が変わり、部局ごとの研究内容に相違等があるため、前年度の番組制作から得られたものを直ちに次年度の番組制作に生かすことが難しい。このため、番組を制作するうえで放送局関係者とできるだけ早い時期からの打合せにより企画・立案を進め、大学の研究成果を番組になじみやすい講座内容として構成する必要がある。
- (2) 講座内容の検討や原稿作成の時期が入学試験の時期と重なり、各講師予定者の最も忙しい時期となるため十分な検討がしにくいといったことがある。又、本学ではスクーリングを土曜日に実施しているが、去年5月より土曜閉庁となり、教職員への負担が増大するのが予想される。
- (3) 放送講座のテープの二次利用については、受講生や企業、団体等から希望が寄せられる場合がある。大学における学術研究の成果の開放であり、大学開放の意義からも、より広汎に利用できるように検討されるべきであると思われる。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 暮らしの中の看護と医療技術

主任講師：医療技術短期大学部教授 東 雍

今年度のテレビ放送講座は、大阪大学医療技術短期大学部（以下、医短）が担当した。平成4年は、医短の創立二十五周年に当たっており、その記念事業の一環として行われた。主題は、医短の3学科（看護学科、診療放射線技術学科、衛生技術学科）に共通したもので、且つ受講生が興味を示すものということで「暮らしの中の看護と医療技術」とし、日常生活に密着した看護や医療技術の問題を取り上げ、その実践がどのような科学的根拠に基づいて行われているかを講義することとした。そして、13回放送分を5，4，4に分け、それぞれを看護学科、診療放射線技術学科、衛生技術学科で受け持ち、講師に選ばれた教官に自分の教育研究の成果の中から主題に相応する副題を出してもらった。しかし、教官から出された副題は、形苦しいものになりがちだった為、テレビ制作スタッフの方々のアドバイスを受け、平易で講義内容の変わらない中身を端的に表す言葉に変えて、それを個々の講義の題とした。放送順については、第一回目のトップに学長に挨拶を述べて頂き、3回目までは総論的な講義を、4回目からは各論的な講義を行うことにした。

(テキスト)

最近の医学・医療の進歩に伴って、医療関連の知識の普及には目を見張るものがあります。しかし、受講生の年齢、性別、学歴、職歴等の多様性を考えると、できるだけ平易な言葉で誰にでもわかるように読みやすいテキストを作成するように心掛けた。印刷され出来上がったテキストについては、医短の卒業生、在学生やテレビ制作にご協力いただいた方々から手に入れたいとの要望が多々あったが、受講希望者以外の人達には、配布できなかったことが心残りであった。

(テレビ放送)

放送用の台本は、放送時間45分の制限があるため必ずしもテキスト通りではなく、テキストの内容を要約したり、省略したりで、担当ディレクターと各講師が数回打合せをして作成した。録画撮りは、講師が最も緊張し精神的に負担を感じるところであったが、アナウンサーやディレクターの方々に助けられ完了し、更にそれを45分に見事に編集された映像を見るにおよび、さすがにプロの手腕と感服させられた。

(スクーリング)

前半、後半の2回に分けて開催したが、看護や医療への関心の高さの表れか、約100名近い参加者であった。また、質疑については個々の医療相談にならないようあくまで講義内容に関するものと限定したものの、予定時間をにオーバーする活発な質疑応答が交わされた。

(ラジオ科目) 現代社会を考える

主任講師：教養部教授 大村 英昭

激動する現代社会。どう切り込んでも、「不透明」であるとの印象は免れないだろう。遠くにある国際社会の動向が、しかしながら、いつの間にか、我々のごく身近かな生活世界にも影響を及ぼしている。その周りの関連性を解きほぐして説明できれば……。企画者のねらいは、講師・受講生、双方の熱意によって、ある程度は満たされたものと考えているが、実施上の責任者として、なお若干の反省点もある。そのことを報告して所見にかえたい。

(企画について)

本学の放送講座は、原則として、毎年各部局が持ち回りの形で担当する。研究所や学部によっては、テーマを思いきりしぼって専門コース型を採ることもできるが、私たち教養部のように多くの分野を包括する部局では、いきおい幅広く多角的にアプローチする教養コース型になりやすい。以前に人文系ブロックが担当したこともあって、今回は同じ教養部の社会系ブロックが引き受けたわけだ。それでもテーマのしぼりはとりわけ困難を感じた。数学を得意とする統計学から、近代の政治状況をフィールドとする政治学、憲法や刑法を扱う法学、それにその分野自体がいよいよ拡散しつつある社会学や経済学へと、それぞれの各担当者の専門が広域にわたっているからである。おまけに、幸か不幸かブロックの全員がほぼ平等に参加して13回がまかなえる。つまり、テーマに即して誰かを除外するのは、かえって具合が悪い。かなりの議論をして、いかにもしぼりの悪いテーマに落ち着かざるを得なかった。換言すれば、13回の各サブテーマに関しては、いずれもつっこみの足りない講座になったはずである。少なくとも、

大 阪 大 学

2回のスクーリングに参加して下さった方々の質問から推して、各回のサブ・テーマに即して、もう少し深いところを聞きたいという希望がうかがえた。

(テキストと放送について)

テキストについても、上記のいささか中途半端という難点は感じる。もちろん、45分の放送には各回ともかなり多くの情報をつめこんであるのだが、さりとて広く一般読者に提供するには足りない。もう一点、今回は特に現代に焦点があるので、例えば、ヨーロッパ情勢のようにテキスト執筆と放送時では、ズレが生じてくるといったこともあった。歴史的な変動などと言うが、なるほど、学者が心がける構造分析は、今の時代にとりわけやり難いと感じた。放送に関しては、例年通り、ストレート・トークではなくアナウンサー1名との対話形式を採って良かったと思う。なぜなら、脚本が必要となるため、ラジオ局側の担当者は大変だと思うが、放送メディアに特有な表現上の問題など、講師側に学ぶところが多いからである。

Ⅱ. 制 作 報 告

(1) 制作責任者報告

サンテレビジョンプロデューサー 大原 性宣

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

(1) 制作の基本

健康問題の中から今日的テーマを選んで、いかにわかり易く視聴者（受講生を含めて）に理解してもらえるかを制作の基本にした。従って、演出方式はスタジオで必ずきき手が出演者に質問する形をとった。テキストでは理解できない部分或いは表現が困難な部分は病院現場のロケ或いはCGを多用することによって理解を深めるよう配慮した。

(2) 大学その他の関係機関

今回の制作に当たっては、大学側は勿論、大学から紹介の関係機関での取材は極めてスムーズに行われ、何一つ問題らしきものは起きなかった。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

企画・構成についてはテキストに拘らず、映像によって視聴者に理解を深めることを基本にして、出演者とディレクターとの話し合いを重ねて行った。一般視聴者の立場も考えて、放送ではテキストの事には一切触れない形をとる事にして制作を進めた。現在の医療現場には、数多くのコンピューターとコンピューターによる映像が導入されているが、それ等をいかに放送に有効に使用するか、経費、編集時間等を勘案しながらの制作であった。

3. 番組の視聴の状況と成果（評価、反応）について

「健康」は現代人にとって最も関心の深いテーマだけに、今回の放送講座の受講生も 450名を超える近來にない多数に上り、第1回のスクーリング参加者も100名を越す新記録になった。放送の中では「胎教を見なおす」「体の中を画でみる」「皆で考えようターミナルケア」等については電話による多数の問い合わせやビデオ販売の要望が寄せられ、健康に対する関心の深さを物語っていた。

視聴率については、京都、和歌山、奈良、滋賀の各U局では調査会社に参加していないため計測不能で、サンテレビの加入しているニールセンはサンプル数が少なく地域も偏ってはいるが、一応放送期間中の数値は 0.4%～ 0.8%で通常編成と変化がなかった。

新聞のテレビ欄では「大阪大学放送講座」の一行のみしか掲載されず、PR方法については、再検討の必要がある。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

(1) 編成時間帯

民教協側の要望時間帯は固定スポンサーがしっかりと腰を下ろしているため、今回は木

曜日午前8時15分～9時に設定したが、NHK朝の連続テレビ小説とバッティングして視聴率上問題であった。

(2) 受講生と一般視聴者

テレビ電波という公共の媒体を使って、ひとにぎりの受講生が大切なのか、受講生の何十倍もの一般視聴者の立場をどうするのか。テキスト購入の受講生についてはスクーリングの機会にフォローできるにしても、一般視聴者にとっては放送講座は一方通行である。果たしてスクーリングが絶対必要なのか、現在の一方通行的放送を双方向性を取り入れる方法など、検討すべき課題である。

(2) 番組制作担当者の所見

サンテレビジョンプロデューサー 大原 性宣

- 平成4年度の担当は医療技術短期大学部で、第1回の10月1日放送から第13回12月24日の放送まで、13テーマを16人の先生方が受け持たれた。先生方のほとんどがテレビ出演未経験ということもあって、打ち合わせ時から極めて積極的にご協力いただき制作スタッフの注文に対しても謙虚に受け入れ、両者は非常に良好の中に制作はスムーズに進行した。放送講座の主任講師の東教授が出演しないいわゆる黒子役に徹してテーマ設定から講師と制作スタッフのネゴシエーションに努力いただいたことが、スムーズに制作につながったと考えている。
- 「健康」は現代社会にあって最も関心の強いテーマで、今回の受講生は450名に達し第1回のスクーリングには100名を越す新記録となった。特に「胎教を見なおす」「体の中の画でみる」「皆で考えようターミナルケア」等については電話による問い合わせが殺到するとともにビデオ販売の要望などが寄せられた。
- 編成時間帯が木曜日午前8時15分～9時に設定したため、NHK朝の連続テレビ小説と重なり視聴率については1%を超えず、新聞のテレビ欄では「大阪大学放送講座」の一行のみの掲載となり放送時間帯、PR方法については今後再検討の必要がある。
- テキスト購入の受講生については、スクーリングの機会にフォローできるにしても、多数の一般視聴者にとっては放送講座は一方通行で、放送を見ている大部分の一般視聴者のフォローを今後どういう形にするか。生涯学習問題を含めて今後の大学放送講座の大きなポイントになってくる感じがする。

制 作 報 告 (ラジオ科目)

(1) 制作責任者報告

近畿放送ラジオ局ラジオ制作部長 小杉 征義

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

大学教育を広く地域社会に伝達するにはその媒体として、電波が最適で最強であると常に確信しながら番組制作にあたって来ました。特に大学の研究成果を地域の放送局が広く電波にのせることは、その地域の文化学術的な活性化にとって大変意義深いものがあります。

しかし、専門的な学問領域を不特定多数の一般聴取者に伝えることは、なかなか至難の技であります。

今回はそのテーマを“現代社会を考える”とし、激動する社会情勢を政治・経済・社会・宗教などの学問を通して見つめ今の世の仕組みを解析、今後の見通しをつけていく事をねらいとしました。

このように一般社会人にとって興味深いテーマではありますが、出来るだけ分かりやすくするためその講座内容のレベルを、一般教養課程の学生を想定したものとし、学術的内容を如何に平易に変換出来るかを最重要課題とし、制作の基本方針としました。

大学の先生方にはこうした制作の意図、構成上の基本方針をご理解いただき快くご協力をいただきました。また研究協力課の職員の皆様方には、全体会議はじめスケジュール調整等に大変なご協力をいただき何の不都合もなく予定通り収録させていただきました。

こうした先生方はじめ研究協力課の皆様のご協力が、番組制作の大きな力となったことを報告し併せて深く感謝するものであります。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

上記の制作基本方針から、最も時間をかけたのは放送シナリオの作成でした。先生方には講座全体の統一テーマを考慮しつつ、それぞれの講座のテキスト原稿を執筆いただきました。それを基にどう平易に変換できるか。テキストを持っている人にも持っていない人にも理解してもらうには、内容をどう組立てればよいか、重点をどこに置けば良いのかなどいろいろ練り直しながら時間をかけてシナリオを作りました。もちろん先生の主張を損なってはいけません。先生とライターとの間で何度もキャッチボールが繰り返されました。

次に、聴取者が番組に溶け込みやすい雰囲気を作り出す為に先生と女性アナとの対話形式をとることにしました。アナは聴取者の代表として質問者の立場に立つのです。

また、番組の途中コーヒープレイクを設け、テーマに沿ったエピソードや先生自身の体験談などをお話いただき、先生の人柄が出るよう演出しました。不思議な話や、珍しい事例、おかしな体験があったりで受講者のいい休憩タイムになったと思います。そして収録には、時間を気にせずに自由にお話いただき、先生の主張が明確に出るよう配慮しました。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

聴取率としては決して高い数字ではありませんが、聴取の質という点ではかなり良質なものがあつたと推測しています。それは今回のテーマが私達の生活環境の中でいつも話題になっているものばかりであつたため、13回のそれぞれが大変興味深いものに仕上がつたからです。

例えば偏差値を考えたり、情報セキュリティを取り上げたり、日米の経済関係、余暇利用、ファジーの意味、夫婦別姓、新々宗教がもてはやされる背景などなど・・・その一つ一つがテキストを持っていなくても聴取者の関心と呼んだであろうと信じているからです。スクリーニングの時の受講生の熱心さからもそれらのことは伺えました。

講座のテーマが身近なものであればある程、聴取者の関心と興味は高まりますし、それは受講生の拡がりやファンの定着をもたらします。そして次年度放送講座へとつながっていくものと思います。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

45分という放送時間を充実させるには、テーマの絞り込みが必要になってきます。講座のねらいをしっかりと定め、全体の統一テーマとの絡みを見極めた上で、一つ一つの講座内容を組み立てなければなりません。講義に熱が入るあまりついつい時間をオーバーし、面白い部分をカットしなければならない辛い場面もありました。また、収録のたびごとに痛感したのは、対話形式の難しさです。スタッフ側に専門知識の不足があり先生方には放送の不慣れがありで、折角の対話形式のシナリオも妙に緊張して不自然な会話になったこともしばしばでした。

ガラス箱（スタジオ）の中でどう自然に話していただくか、我々がそれをどう引き出していくかが今後に残される大きな課題のように思います。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：近畿放送ラジオ制作局ディレクター 坂下 勝子

「現代社会を考える」——大きくて漠然としながらも、今の世界や日本の情勢から見て、まさに時代にJUST FITした今回のテーマでした。

今回は日米構造協議や、ヨーロッパ情勢など節目を迎えつつある国際社会関係から、一方日本国内での会社経営組織と品質管理、教育問題、そして昨今の労働時間短縮に伴う日本人の余暇、近い将来の実現が期待される夫婦別姓、そして今まさにブームといえる宗教に至るまで、このように個々のテーマを少しばかりあげてみても実にタイムリーで、しかも興味深いものばかりでした。先生方は、このような本当に多種多様なテーマを通じてそれぞれの視点から大きく現代社会をお話して頂きました。毎回毎回はそれこそ全く違ったジャンルでしたが、それさえももしかしたら“現代社会”を象徴しているのかも知れません。

なお、制作にあたりましては、基本的に次のような方法をとりました。

- ・先生方からいただいたテキストをもとに、テキストがなくても理解出来るように構成したアナウンサーとの対話形式のシナリオを作る。

- ・そのアナウンサーは進行役であるとともに、一般聴取者の代表としての立場でお話を伺う。
- ・収録時には時間をあまり気にせず、お話しを続けていただき、出来るだけ先生ご自身の主張と人柄がでるようにつとめる。
- ・聴取者の息抜きと先生の別の一面がうかがえるようレストタイムを設け、テーマに関するエピソード等をお話しいただく。
- ・ヨーロッパ情勢など刻々と変化が予測されるテーマの場合は、放送日と収録日が離れすぎると、誤った内容を放送することにもなりかねないので、十分配慮する。

放送を終えて、今回特に感じましたのは、放送時間のことでした。今回のようにさまざまな角度から1つの大きなテーマをおさえようとするのには、45分は少し短かったように思います。テーマにもよるかもしれませんが、聴く側にも作る側にも欲求不満を残さないようにするには、1時間くらいは必要ではないかと思えます。

また、ちょうど講座の中間地点にあたります7回の放送終了後と最終回の放送が終わりましてからの2回、受講者を対象にしたスクーリングが実施されました。放送ではいき届かなかった部分の補足説明をまずそれぞれの先生がされ、後に受講者からの質問を受け付けるというスタイルで、2回とも80～100名くらいの出席がありました。受講者の中には、テープレコーダー持参で先生の話に聞き入る熱心な人も多く、質問コーナーでも積極的に質問が飛ぶなど、スクーリングに出席してみて改めてこの講座が生涯教育において重要な位置をしめていることを実感させられたように思います。

Ⅲ. 講 座 の 概 要

◎ 科目の概要

科 目 名	中心的なテーマ	科目のねらい、内容・方法	放送曜日・ 時間・期間
くらしの中 の看護と医 療技術 (テレビ)	本学部で日頃行っている看護・医療技術に関する教育研究の中から、その実践がどのような科学的根拠に基づいて行われているかを解説する。	人間は、受精後胎児期を経て出生し、小児期、思春期、成人期、老年期を経過して生涯を終えます。わたしたちにとってこの過程を通じ、健康を保つことや病気にかからないよう注意することは、最大の関心事だと思います。たとえ病気になったとしても、早く回復してもとの健康な状態にもどれるようにと望むでしょうし、また回復が不可能と思われる場合でも、苦痛や苦悩のない状態で天寿を全うできるようにと願うことでしょう。このような要望に応えるために、どのような方法で対処し実践すれば良いかは、保健医療活動の主要課題で、医師以外に看護婦や様々な職種の医療技術者がこれらの課題に取り組んでいます。 今回は、看護婦、診療放射線技師、臨床検査技師を育成している医療技術短期大学部が担当します。日頃行っている看護・医療技術に関する教育研究の中から、日常生活に身近なテーマを取り上げ、その実践がどのような科学的根拠に基づいて行われているかを解説したいと思います。	サンテレビ (毎週木曜日) 10月1日～ 12月24日 午前8時15分 ～9時00分 KBS京都 (毎週土曜日) 10月3日～ 12月26日 午前8時00分 ～8時45分 琵琶湖放送 (毎週土曜日) 10月10日～ 1月2日 午前6時30分 ～7時15分 奈良テレビ (毎週木曜日) 10月8日～ 12月31日 午前8時30分 ～9時15分 テレビ和歌山 (毎週土曜日) 10月3日～ 12月26日 午前7時15分 ～8時00分
現代社会を 考える (ラジオ)	不透明だと言われる現代社会の中で経済学や政治学、または法律学等それぞれ違った分野から現代社会の仕組みを考察する。	「不透明」だと言われる現代社会。確かに、メガネもなしに漫然とながめています。それこそ目移りして何も見えてこないという仕儀にもなりかねません。そこで、経済学とか政治学とか、それぞれ違った屈折率のメガネを用意して、とりわけ今の世の仕組みについて、それなりの見通しをつけてみようというのがこの講座のねらいです。もっとも完全透明レンズではなく、	KBS京都 (毎週日曜日) 10月11日～ 1月3日 午前8時45分 ～9時30分

		<p>多少の色はついていきますから、「思い込み」を逆撫でするようなところもあるかもしれません。でも、「意外性」に出会うのも悪いことではありません。そのあたりを楽しんで頂ければ幸いです。</p>
--	--	--

◎ 科目の構成

(テレビ科目) 暮らしの中の看護と医療技術

放送回	中心テーマ	内 容	担 当 講 師
第 1 回 (別 記)	医療を支える人々	<p>人はいつまでも健やかで幸せに生きていたいと思っていますが、現実には病や老が遠慮なく訪れるものです。今、仮にからだの具合が悪くて病院へ行くとします。初診の手続きをして専門の医師に診察を受ける際、看護婦のお世話になったり、尿や血液の検査は臨床検査技師に、レントゲン検査は診療放射線技師にお世話になります。また、病気によっては理学療法士や作業療法士に面倒をみてもらうことでしょう。他にもたくさんの職種がありますが、このように医師とともに働く医療技術者によって、医療は支えられていることを解説します。</p>	<p>医療技術短期大学部 学長 金 森 順次郎 医療技術短期大学部 教授 大 西 俊 道</p>
第 2 回	情報化で変わる医療	<p>日本は情報化社会へと突入しつつあります情報がもつ意味を解説しつつ、医療は古代から活躍している情報産業であることをお話しします。</p> <p>次に、診療の情報化、医療機関の情報化の最前線について説明します。また、情報化は情報の公開、情報の流通などをもたらし、そのため新しい医療が誕生しつつあることをお話しします。</p>	<p>医療技術短期大学部 教授 長谷川 利 典</p>
第 3 回	ナイチンゲールから今 看護は	<p>看護は歴史上人類の発生とともにあるといわれています。しかし、最初に看護というものを説明したり記述したのはナイチンゲールでした。彼女の博愛のシンボルとしてのイメージはよく伝わっていますが、看護に関する考えは伝わっていないようです。そこで、ナイチンゲールから今の看護というものについて検討します。</p>	<p>医療技術短期大学部 教授 松 木 光 子</p>

<p>第 4 回</p>	<p>胎教をみなおす</p>	<p>胎教とはどのような概念でしょうか。人それぞれ胎教について様々なイメージを抱いています。何故このように異なった多くの概念が生じてきたのか胎教を分類・整理して理解をすすめるとともに、それぞれの意義について考察します。次に胎教の科学的な根拠となる胎児生理学の最近の知見を紹介し、「音」を取り上げて胎教としての音楽鑑賞と科学との接点を探ります。</p>	<p>医療技術短期大学部 教授 山 地 健 二 医療技術短期大学部 講師 小 山 田 浩 子</p>
<p>第 5 回</p>	<p>身近な免疫学</p>	<p>免疫という現象がどのような経過で体験され体系化されて来たかを述べ、それが医学の歴史であることを明らかにします。免疫は元来ヒトが自己保存の目的で進化とともに獲得し、脳の機能とともに最高に達していると考えられますが、正と負の作用が存在することも明らかになりました。如何にして負の部分を克服し、正の部分を活用するかを具体的に述べたいと思います。</p>	<p>医療技術短期大学部 教授 渡 邊 信 一 郎</p>
<p>第 6 回</p>	<p>ホルモンと病気</p>	<p>各種のホルモンが種々の内分泌腺から分泌され、体内の状態を一定に保つようにその一役を担っています。甲状腺も内分泌腺の一つであり、今回は甲状腺機能異常について、その対応策をまとめてみました。又「甲状腺機能状態を把握するための最もよい指標は何か？」など、ホルモン分泌調節機構に関しての特徴にも触れてみたいと思います。</p>	<p>医療技術短期大学部 助教授 真 下 一 彦</p>
<p>第 7 回</p>	<p>体の中を画で見る</p>	<p>最近では普通のレントゲン写真の他に、からだをあたかも胡瓜を輪切りにしたような臓器の断面の画を見ることができるようになっています。また、X線ばかりでなく超音波の反射や磁気の共鳴や吸収などを利用して画を観察できます。どのような原理で、どんな画が見え、病気の診断に役立つのかを紹介します。</p>	<p>医療技術短期大学部 教授 稲 邑 清 也</p>
<p>第 8 回</p>	<p>皆で考えようターミナルケア</p>	<p>日本では、医療や生活の改善により平均寿命の大幅な延長が達成されています。しかしながら、人の命は有限であり、いずれはこの世にわかれをつけなければなりません。私たちの誰もが最後に経験しなければならない「死」ですから、身体的苦痛をなくし、有意義な終末を迎えるにはどうすればよいかについて考えたいと思います。</p>	<p>医療技術短期大学部 助教授 城 戸 良 弘 丸 橋 佐 和 子</p>

第 9 回	役に立つ放射線	医療における役に立つ放射線を考えます。放射線の診断や治療の効果は、莫大であるだけに被曝の裾野も広く、放射線障害発生の可能性を事実上ゼロに近づけることのできる放射線技術が必要です。医療利用における華々しい面は他章に譲り、放射線被曝の現状、放射線の人体影響の基礎、そして放射線防護の基本的な考え方を学びます。	医療技術短期大学部 助教授 森川 薫
第 10 回	若さを保つ —中高年の運動処方—	高齢化社会を迎え、また余暇時間の増加にともない、健康への関心が高まっています。そこで、中高年者が健康増進のために運動をする時に、どのようなスポーツをどれくらいの強さで、どれくらいの回数をすればよいのか、という目安を知るための運動処方について、心臓循環系と骨格筋系に焦点をあてて説明します。	医療技術短期大学部 助教授 東 照 正 平 井 富 弘
第 11 回	尿で健康チェック	高齢化社会においてquality of life を充実させるには、各人が自らの健康を守るという意識も必要です。最近の医療技術の進歩により、自宅で容易に尿蛋白、尿糖などが調べられるようになりました。今回は在宅検査として尿で健康をチェックする実際の正しい方法と注意点を、理論面および実演を交えて解説します。	医療技術短期大学部 教授 折 田 義 正
第 12 回	地域における老人 看護	高齢者の方は、慣れ親しんだ生活の中で健康に過ごせることを、先ず望まれます。しかし、加齢に伴って個人差はあっても、不可避的な退行変性が徐々に進み、健康状態に支障が生じることが多いものです。そこで、各人のそれまでの生活環境を重視した、健康保持や疫病時の看護について方法やシステムを説明します。	医療技術短期大学部 教授 氏 家 幸 子
第 13 回	日本の医療を世界 に生かす —医療技術の国際 協力—	開発途上国への国際協力の中で、保健医療分野の援助は大きな地位を占めています。国際協力は海外での病院建設から国内での研修に至るまで、様々な形で行われています。しかし、その実態はきわめて断片的にしか知られていません。本番組では、医療技術の国際協力について、基本理念、成果、評価、問題点、そして将来の展望について、系統的かつ具体的に取り上げ考えてみます。	医療技術短期大学部 教授 稲 本 一 夫

(ラジオ科目) 現代社会を考える

放送回 (月日)	中心テーマ	内 容	担 当 講 師
第 1 回 10月11日	日本の品質管理	日本の工業製品は、世界各国のなかでも非常に優秀なものが数多くあります。安くて優秀な工業製品が作られるようになったのは、ここ20年位の間でしかありません。日本の産業界は、どのような努力をして今日の地位を築いたのでしょうか。ここでは、工業生産についての中心的な考え方の一つである品質管理について考えていきます。	教養部助教授 磯 貝 恭 史
第 2 回 10月18日	日米構造協議の背景	日本の対米貿易収支の大幅な黒字や日本企業のアメリカ企業・不動産などの買収活動により、ここ数年の日本とアメリカの経済関係は激しくゆれ動いております。そのため、日米両国間でのいろいろな経済問題を日米構造協議という形で解決しようとする動きがでてまいりました。ここでは、その動きの背景を理解することを目的とします。	教養部助教授 小佐野 広
第 3 回 10月25日	ヨーロッパ情勢への視点	1990年代さらには21世紀の地球社会を展望するうえで、ヨーロッパの動向は、ますます重要性を増しています。いったい、ヨーロッパは、これからの世界の中でどのような方向に向かうのか、そして日本に住む私たちは、そこから何を学びとるべきなのか考えてみたいと思います。	教養部講師 木 戸 衛 一
第 4 回 11月 1 日	戦後日本の平和論	戦後日本の価値観を代表する言葉として、「平和と民主主義」という語が使われます。「平和」の問題は、「近代」や「社会主義」等とともに、戦後の思想界の重要テーマでした。戦後思想の一断面を示すものとして、「平和」の問題がどのような歴史的文脈でどのように議論されたかを検討します。	教養部助教授 米 原 謙
第 5 回 11月 8 日	公共部門の役割	私たちがふだん暮らしている社会は、資本主義社会とよばれていますが、いうまでもなく純粹の資本主義社会ではありません。資本主義の経済メカニズムでは、うまくいかない部分を政府が補正してきたのが、現在の日本の社会であり経済であります。このような観点から公共部門の役割を考え、きたるべき高齢化社会においてさらに重要となる国・地方の関係をもあわせて考察します。	教養部教授 齊 藤 慎

第 6 回 11月15日	自由時間と日本人	このところ、労働時間の短縮が喧伝されていますが、私たちは余暇をどのように使っているのでしょうか。まず人間にとっての労働の意味と自由時間の意義について原理的に考察し、特に技術文明の下での労働の性格と余暇の活用の仕方を確認するとともに、自由時間を生かすための主体的条件について考えてみたいと思います。	教養部助教授 大 林 信 治
第 7 回 11月22日	曖昧なもの	「曖昧なもの」ということを手掛かりに、「近代社会」と「囲いこみ（境界設定）」について考えます。なぜ「曖昧なもの」「ふまじめなもの」が、ポストモダンなのか、なぜ先端科学や技術がそこに結びつくのか、ということも念頭において考えます。	教養部講師 山 中 浩 司
第 8 回 11月29日	平均を考える	平均やそれに関連した偏差値などは、試験成績などいろいろな場面で多用されています。それらは正しく使われているのでしょうか。どうもそうでないように思われます。この章では、平均とそれに関連した概念の性質や限界について、使い方やどういう所で使われているかの例をあげて考えてみたいと思います。	教養部助教授 白 旗 慎 吾
第 9 回 12月 6 日	情報化社会の明暗 —情報の安全性維持—	情報化社会は、情報の価値が評価され流通する社会である。この社会の基盤を構成する情報・通信技術の「明」部分は常に脚光を浴びているが、この背後にあって地味に情報の安全性維持に貢献している分野がある。情報セキュリティといわれている分野におけるわが国の営みの一端を説明し、社会の理解を得たいと思います。	教養部助教授 萬 代 三 郎
第 10 回 12月13日	日本の犯罪と刑罰	犯罪や刑罰に関するニュースは、毎日のように新聞・テレビ等で取り上げられています。そのわりに私たちは、その全体像について正確な情報を得ていないように思われます。この章では、わが国の犯罪と刑罰の現況を犯罪白書等の資料によって紹介し、現代社会の罪と罰にかかわる諸問題を考えるための素材を提供したいと思います。	教養部教授 森 本 益 之
		我々人間は、教育をぬきにしては、その存在も成長もありえません。教育には、親・家族だけでなく、社会・国家も強く深いかわ	

大 阪 大 学

第 11 回 12月20日	現代における教育 と国の役割	りを持っています。しかし、社会・国家のか かわりは、一面、「個人（私的なもの）」対 「社会・国家（公的なもの）」の緊張関係に あります。この章では、法的観点から、この 緊張関係の現状を学説と判例を通して考察し ます。	教養部教授 伊 藤 公 一
第 12 回 12月27日	夫婦別姓を考える	夫婦は、同じ姓で子供も同じ姓という考え 方に対して、異義を唱える人たちが徐々に増 えている。個人を尊重するために、別々の姓 のまま結婚することができてもいいではない か、というのである。ここでは、現在の「夫 婦別姓」問題をめぐる状況の中から、現代社 会における夫婦・家族の関係を考えてみたい と思います。	教養部助教授 灰 谷 文 雄
第 13 回 1月3日	現代人の宗教	新宗教、新々宗教という言葉も、おなじみ になってきました。オウム真理教や幸福の科 学がマスコミでとりあげられたためでしょう。 現代の宗教は、他にもたくさんあります。な ぜこれだけはやるのか、を現代社会の悩みや 不安とは何かをとおして考えていきます。	教養部教授 大 村 英 昭 教養部助教授 橋 本 満

◎ 受講生の応募等

テレビ講座 447名

ラジオ講座 352名

◎ スクーリング

(テレビ科目) 暮らしの中の看護と医療技術

	実 施 場 所	実 施 日 時	備 考
第 1 回	大阪大学医療技術短期大学部	平成 4 年11月21日 (土) 午後 2 時～ 4 時	
第 2 回	(豊中市待兼山町 1-1)	平成 5 年 1 月23日 (土) 午後 2 時～ 4 時	

(ラジオ科目) 現代社会を考える

	実施場所	実施日時	備考
第1回	大阪大学教養部	平成4年11月28日(土) 午後2時～4時	
第2回	(豊中市待兼山町1-1)	平成5年1月9日(土) 午後2時～4時	

◎ 再視聴

実施場所	実施期間・日時	備考
大阪大学附属図書館 (吹田市待兼山町1-1)	(実施期間) 平成4年10月1日(木)～平成4年12月21日(月) 平成5年1月11日(月)～平成5年1月18日(月) (開館時間) 月曜日～金曜日, 午前9時～午後9時 〔土曜・日曜・祝日及び書架整理日(10月30日と11月30日)については、閉館〕	